

天地

ネットワーク テーブル 501号

天地シニアネットワーク 2019.11.15

TENTĪ TODAY <メール版・500号・祝辞>			1
会員の広場			2
	第二の故郷・千曲川の決壊	岩淵 彰	3
論 考	中国人から見た日本人の言語表現心理（9） <和するために仮定にして控えめに言う>	兪 彭 年	4
随 想	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 <その8>「被災時の冷静さと立ち直りの早さ」	臺 一郎	5
随 想	海外随想録：4 グランドキャニオンの思い出	森永 善彦	7
随 想	バブル経済を懐かしむ	池端千一郎	9
講演会	「新三木会」「奈良興福寺文化講座」		10
事務局			11

TENTĪ TODAY

皇室の即位のパレード、今回は昭和33年でまだ大学2年生、家のテレビで拝見しましたが、当時はまだ白黒の時代、ニュース映画をみるようで、距離がありました。今回もテレビで拝見しましたが、画面は鮮やかで鮮明、両陛下がすぐ間近におられるように感じられました。皇室と国民の間が近くあることは海外に誇れること、いつまでも続くことを願っています。

来年の東京オリンピック、マラソン、競歩の会場が、札幌へ突然変更になりましたが、小池東京都知事だけでなく、大半の日本人にとっても「青天の霹靂」だったに違いありません。日本の夏が高温、多湿なことなど、承知されたうえで開催地に決定したと思っていました。

誘致には巨額の税金が使われていますか。最初からの経緯を再確認し事実関係を明らかにして今後に活かして欲しいものです。

長期政権となってきたせいでしょうか、安倍首相初め閣僚の方たちの国民に対する説明が、丁寧さを欠いているようです。ただ説明すれば良いというわけではありません。政治には責任がつきもの、常に真摯にお願いしたいものです。裸の王様になっては困ります。

高校時代のクラス仲間の高崎さんと、同じ同級で来日中の兪彭年さん（現在掲載中の「中国人から見た、日本人の言語表現心理」の著者）会食しました。お話では、以前に紹介してあった長野県下伊那郡阿智村にある「満蒙開

拓平和記念館」に、中国人の仲間、20人ほどを連れて今春訪ねたことでした。中国人の民間団体が来館したのは初めてということで、現地で歓迎されたようですが、愈さんのお仲間、温泉があって、歴史的な由緒のある、人に知られてないところへ行きたいという希望が強いそうで、苦勞しているようです。次回は、永平寺をかんがえているとのこと。日本へ来る中国人観光客もリピーターが増え、玄人化しているように感じています

当ネットワークでは、先月15日に発信したメール版が、500号を迎えました。祝辞、祝句をいただき、感謝感激、有難うございました。どこまで続くか不明ですが、投稿、寄稿がある間は続けたいと思っていますので、よろしくお願ひします。(敬称略させていただきます。)

いつも恵送に与り有難うございます。誌齡が500号という節目の記念を迎えたのですね。オメデトウございます。そして、長い間の手作業の編集作業…、すごいこと…、誠にお疲れ様です。

まことに拙いものながら、気持ちだけ、祝い句のつもりのものをお届けします。

指打ちの誌齡尊し照紅葉
高説のはしる誌面や菊日和

これからもどうぞお元気で、編集にご精勵ください。 伊藤裕元

ご無沙汰しております。いつも配信していただきありがとうございます。

500号配信おめでとうございます！2000年3月が1号とのことですが約20年続くとは凄いことですね。王 貞治さんのホームラン記録を超えるのですから……。寄稿される人のネットワークに感心します。

毎回、冒頭の津田さんが書かれている「TENTI TODAY」を楽しく読んでいます。今回500号の「160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人」や「海外随想録」も楽しかったです。

津田さんの編集作業も大変ですね？以前、視力のことを言われていた事がありました。長時間パソコンに向かっていると本当に目が疲れますね。私は、孫のプレゼンとの「ハズキルーペ」をかけていつもPCに向かっています。異常気象で暑かったり、寒かったりですが、ご自愛下さい。

福田義則

天地ネットワークテーブル500号。2,3号ならともかく10号だって維持するのは大変なことです。継続は偉大なり。誠におめでとうございます。長期にわたる大変なご尽力に対し、それも津田さん周辺の人脈を駆使して展開できた偉大な軌跡と、心から尊敬いたしております。似た作業とセンスが基盤になる業界に長期間居ましたので、ご苦心のほどがいくらかでも想像できます。

林 英一

歳をとると知見や経験が拡大しません。話題は昔話に収斂しがちですが、そ

れも後の世代には何らかの参考になるはず、と健康が許す限り、タネが切れるまで頑張ってください。

長い間、ありがとうございました。

寺島 昭彦

500号、敬服してます。継続は力……ですね。と、同時に、まだまだ、一里塚。今後も楽しく読ませてまいります。多謝。

有田

会員の広場

< 第二の故郷・千曲川の決壊 >

岩淵 彰

千曲川決壊のニュースには本当に驚かされた。信州は学童疎開の地、東京生まれの私には、浅間山と千曲川は第二の故郷である。かつて小沢昭一氏が自分の俳句の原点は戦争直後の焼け跡の少年時代にあると何かに書いておられたが、私も俳句を詠むときいつも信州のあの多感な少年期から始まるように思われるのである。

早春の一日千曲源流を訪ねて141号線を折れ川上村に奥深く分け入った。日本一賢いといわれる「川上犬」は村にも数少なく天然記念物に指定されていて全国でもわずか数百頭といわれる。流れは次第に細くなり村を外れるとすべては峡谷と水の音。滴りまで見極めることはできなかったが、わが千曲川の生まれるところまで見極めたつもりにはなった。

ものの芽や千曲源流このあたり

甲武信岳は分水嶺で甲州（山梨）武州（埼玉）信州（長野）に跨る名峰だが、信州側に落ちて千曲川信濃川となり日本一長い河川として日本海に放出される（全長・367キロ）。小諸、上田、川中島 飯山、野沢温泉など流域を幾たびか旅したことを思い出す。

別所温泉行、単線の上田電鉄の鉄橋が水没している写真には思わず息をのんだ。つくづく考えるに都会人は日常自然とは殆んどかかわっていないで生きているということである。自然に親しむなどと言う都会人はおこがましいのである。

引き換え地方の人たちの日常はすべての生活が自然と親しみ、共生していることである。一旦自然が凶暴になると居宅はもとより田畑、職場、ライフラインが一挙に崩れて生きるよすがをすべて失ってしまうのである。都市は生産手段を失わない、職場も失わない。

しかしてリンゴ畑の惨状を見よ、地方は生活すべてを失うのである。わかっていることとはいえ国の迅速かつ徹底的な支援が必要だ。

中国人から見た

日本人の言語表現心理（9）

俞彭年

和するために仮定にして控えめに言う

断定の助動詞「だ」の仮定形「なら」には、相手に和するために押しつけを避けて仮定にして話を進める機能があるのではないか。和を保ちながら相手と和して会話をするには、押しつけは禁物だ。相手が断定したことや思っていることなどをそのまま自分の話の前提や話題にするのはおしつけがましく、失礼に聞こえて和することが出来ないという気持ちが働く。

そこで「なら」を使って相手の断定したことや思っていることなどを仮定とし、それでもって相手に和して自分の判断、主張、意見、見方、考え、対処、対応などを述べる。

仮定であれば押しつけとして取られることはないはずだ。そして自分の判断や主張や対応などは仮定の下での判断、主張、対応であるから仮定が成立しなければ当然この判断、主張、対応も成立しないことを相手に知らせる。

こうして話は控えめに聞こえる。例えば、「僕にできるかな。」「君ならきっとできますよ。」の会話では、「僕に出来るかな」に和するため、相手を「君なら」と仮定して、それから自分の判断「きっとできますよ」を述べている。「君はきっとできますよ」では相手に和している気持ちと控えめが表れてこないのではないか。「なら」は、このようなメカニズムが前提として日本人に暗黙に理解されている。

中国人にとって「なら」が難しいのは、暗黙に理解されたこのメカニズムの前提をなかなか体得できないからだろう。

中国人日本語学習者は、「なら」を使った日本語の言葉はおおかた意味がわかり、訳せる。前の例を中国語に訳すと「我行吗」「你的話一定行」となるだろう。しかし、その逆、つまり中国語の言葉を日本語に訳すときは「なら」が思うように使えない。これはまだ「なら」がはっきり理解できず、身につけていないからだろう。

例えば、「我口渴、想喝水」「你想喝水、就喝这杯茶吧」の会話を見てみよう。

この会話を日本語にすると「のどが渴いた。水か飲みたい。」「水が飲みたいなら、このお茶を飲みなさい。」となる。「このお茶を飲みなさい」という対応は「水が飲みたいなら」という仮定の下での対応であり、この仮定は相手の「水が飲みたい」という願望から来ていて相手に和している。

「なら」のメカニズムを体得できないと、「水が飲みたければ」となったり、「水が飲みたかったら」となってしまうだろう。「ば」も「たら」も仮定を表すと思っているからだ。中国人にとって「なら」「ば」「たら」の三者の区別は確かに難しい。

もう一つ例を挙げよう。「你脸色不好感冒了?」「是的。」「感冒的话、多休息、多喝开水。」これを日本語にすると、「顔色が良くないですよ。風邪を引いたのですか。」「ええ。」「風邪なら、ゆっくり休んで、お湯をたくさん飲むといいですよ。」となる。

「ゆっくり休んで、お湯をたくさん飲むと良いですよ」は「風邪なら」の仮定の下での意見であり、この仮定は「ええ」という断定から来ていて相手に和している。しかし「風邪なら」と訳さず、「風邪であれば」や「風邪だったら」と訳してしまう場合が少なくないようだ。したがって、「なら」「ば」「たら」の三者の使い方とその違いを中国人日本語学習者にどう把握させるかは課題の一つであろう。

以前、サントリーが上海でビールを生産するようになったとき、「要喝就喝三得利」というサントリービールのコマーシャルが出た。これを「飲むならサントリーを」と訳するのがコマーシャルとしていちばんよいと思った。「飲むなら」は相手が飲むという前提に和しているから、相手の気持ちをつかんだコマーシャルとなり、宣伝効果大きいと言えるのではないだろうか。

(つづく)

なお、

上記の文章が載った兪彭年著「了解日本、了解日語」、天地事務所に若干あります。ご入り用の方、に差し上げますので、メールでご連絡ください。

160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人（8）

臺 一郎

被災時の冷静さと立ち直りの早さ

我が国は今も昔も地震国であり、台風国であり、火山国だが、下町に多くの木造住宅が密集する江戸市中はそれに加えて火事の都市でもあった。こうした天災や人災に遭って、何もかもを失った人々がいつまでも不幸や不運を嘆いたりせずに、ただちに倒壊した家屋や焼失した店舗を片付け、再建に立ち向かう前向きな姿は、幕末や明治初期に日本を訪れた外人たちを驚嘆させ、感心させ、強烈な印象を残したようだ。

1855年から1861年まで、米国領事及び公使の通訳として滞在した親日派の米国人ヘンリー・ヒュースケンは、著書『ヒュースケン日本日記』の中で、猛烈な台風被災した下田の街と住民の様子を次のように紹介した。

「湾内の船はみな岸に打ち上げられ、下田の街はほぼ三分の一が破壊された。翌朝、前夜の破壊の跡を見てまわったが、浜辺には帆柱が散乱し、倒壊した家屋や船の破片がうず高く積まれていた。しかし、日本人の態度には驚いた。泣き声ひとつ聞こえなかった。絶望なんて、とんでもない！彼らの顔には悲しみの影さえもなかった。それどころか台風など全く関心がないとい

う様子で、嵐のもたらした損害を修復するのに忙しく働いていた」と。

またフランス公使館付きの将校エドワード・スエンソンは、慶応二年の横浜大火直後の被災者の様子を『江戸幕末滞在記』の中で、「(焼野原となった)日本人区は多忙を極めていた。

通りは板、角材の類で埋まり、それを何百人もの大工が鋸で切ったり、鉋をかけたりして忙しく立ち働き、魔法にでもかけられたように次から次ぎへと家が地面から生えて出た。(途中略) 日本人はいつに変わらぬ陽気さと暢気さを保っていた。不幸に襲われたことをいつまでも嘆いて時間を無駄にしたりしなかった。持ち物すべてを失ったにもかかわらずにだ。彼等は被った損害を取り戻すために全精力を集中した。(途中略) 日本人の性格中、異彩を放つのが、不幸や廃墟を前にして発揮される勇気と沈着であった」と感心している。

1866年横浜に赴任した英国第9連隊の将校であったR・ジェフソンとE・エルマーストは共著『Our live in Japan』の中で、先のスエンソンも記述した1866年11月の横浜大火の後における街の再建について、「日本人が、燃え尽した古い家々のあとに新しい家々を急造するやりかたは驚異だ。余燼はまだ燻っているのに、灰からよみがえったフェニックスのように新しい家が建てられるのが見受けられる。火事が収まって二、三時間も経つとひとつの通りがまるごと再建されるのだ。

1866年11月の横浜大火では、こういったふうにひとつの通りがまるまる再建されたが、風向きが急に変わって火が逆もどりし、新しく建った家々を呑みつくしてしまった」とその再建のあまりの速さに驚嘆している。

東京医学校(のちの東大医学部)で教鞭をとっていたドイツ人医師のエドウィン・ベルツは『ベルツの日記』で、1876年の銀座の大火の後の状況を紹介した。

「日本人とは驚嘆すべき国民である。火災があってから36時間経つか経たぬかに、はや現場では、せいぜい板小屋と称すべきものではあるが、千戸以上の家がまるで地上から生えたように建ち並んでいる」と述べ、さらに「彼等(被災者)の顔には悲しみの跡形もない。まるでなにごとにもなかったかのように、冗談を言ったり笑ったりしている幾多の人々を見た」と驚いている。

1885年明治17年に来日した米国の女性人文地理学者エリザ・R・シドモアは、著書『シドモア日本紀行』の中で大火に見舞われたあとの再建の素早さに感嘆して次のように書いている。

『火災の翌日、煙がまだ立ち上る大地で、大工が熱い石や瓦を元気よく踏みながら、新しい住宅を建て始めます。灰から立ち上がる日本家屋の驚くべき迅速さは、他民族の追随を許しません。大火災後12時間以内に商店主は、焼け落ちた小さな売店で仕事を再開します』と。

グランドキャニオンの思い出

今回はアメリカのお話をお届けします。1975年、入社して5年目にアメリカに赴任しました。勤務地及び住まいはロスアンゼルス郊外のTorrance市です。今トヨタはアメリカで約250万台位の車を販売していますが、当時は役30万台でした。

アメリカでは色々な思い出が有りますが、今回は初めてアリゾナ州にある世界有数の景勝地グランドキャニオンに行った思い出についてお話します。

1975年3月初め生まれて初めてアメリカの土を踏みました。赴任の話は急に出たので家族(妻と娘)は私が赴任して1か月後に来る予定にしました。家族が来るまで単身でアパートに住んでいたもので、3月下旬の週末私の上司Iさんが家族と車でグランドキャニオンに行くから一緒に行こうと誘ってくれました。ロスアンゼルスからグランドキャニオンまでは直線距離で600キロ、実際の走行距離は700キロ以上ありました。土曜日の朝出発し10時間掛けてグランドキャニオンに到着しました。初めて見るグランドキャニオンの景観は圧巻でした。コロラド川がコロラド高原を侵食して大きな渓谷を形成し、私が行った観光ポイントは渓谷の幅は10キロ以上、目の眩むような断崖絶壁の上であり、崖の深さは1000メートル以上です。しかも川に侵食された地層がむき出され、大きな渓谷全体が赤、黒、茶色と縞模様になっていて大変綺麗でした。

初めてのグランドキャニオン見物を十分に堪能し、その晩は渓谷の横のホテルに宿泊し、そこでステーキを食べました。観光当日は大変綺麗に晴れていたのですが、翌朝起きたら窓の外は真っ白の雪景色でした。グランドキャニオンの渓谷の岩肌も雪に所々覆われ昨日と違う景観を楽しめました。

朝食を摂って車で帰途に着きました。この帰途、グランドキャニオンを後にしてすぐ事件が起きました。グランドキャニオンの観光センターは主要国道から高原を登ったところに有ったので、帰りは下り坂を道路上の積雪に気を付けて慎重に車で下り、片側3車線の大きな国道に出ました。

運転手はグランドキャニオン旅行の声を掛けてくれたIさんでした。山道を下った国道も車道もすっかり雪で覆われていました。ただし日曜日の朝だったので交通量は少なく、丘陵を縫って走る国道にも車は余り走っていませんでした。

始めIさんは雪の中慎重に運転していましたが前方に車も無いので段々とスピードが上って行きました。多分時速50-60マイル(80-96キロ)、ロスアンゼルスで使用している車なので当然冬タイヤは装着していません。国道は丘陵地帯を所々掘り下げて作って有り大きく蛇行する所が何箇所も有ります。

在る場所の大きなカーブを曲がったら前方3車線を塞いで何台かの車がゆっくり走っていました。スピードが出ていてそのままだと追突する危険が有り

ました。Iさんは急ブレーキを掛けました。ノーマルタイヤ装着の車は制動が効かず、タイヤが雪で滑って高速道路上でクルクルとスピンを始めました。多分3回転しました。

道路のすぐ左側は崖で深い谷になっていました。車はスピンしながら道路の左側に突っ込んで行きました。左側が深い谷になっている事を覚えていたので、一瞬谷に車が転落すると思いました。車はスピンをしばらくして数秒で後ろから道路左側に突っ込んで行きました。しかし幸運にも車は崖から転落しませんでした。

道路わきの積もった雪の中に後ろから突っ込んで止まりました。大変幸運にも深い谷はスピンをした場所の数百メートル手前で終わっていて、軟着陸した道路左側はまばらにモミの木の林になっていました。

雪で上手く衝撃が吸収され、車も人（Iさん一家4人と私）も無事でした。ただ数10センチの積雪の中にはまり込み、道路までは登り勾配になっていたのでどうやっても自力では脱出出来ませんでした。

アメリカ人は親切な人間が多く、我々の車のそばに車を止めて”May I help you?”と言ってくれる人が何人かいましたが、雪に深くめり込んだ車を助けられず、結局”Good luck!”と諦めて去って行きました。車の中にと暫くしてアリゾナ州のパトロールカーがやって来て、警官が事情を聴いて牽引車に無線で連絡をしてくれました。その警官は大きなカウボーイハットを被り、サングラスをしている30代半ば位の格好の良い青年でした。

30分後に大きな牽引車がやって来て、ロープで引っ張り出して貰い、車に損傷はなかったので其の後またIさんが運転を続け、無事ロスアンゼルスに戻りました。

因みにIさんは大変豪快かつ優秀な人ですが、夢中になると周りが見えなくなる性格が有りトヨタでも数々の伝説を残しています。その幾つかを紹介するとー

① Iさんが課長補佐時代多分30代半ば、1人で販売店訪問の出張に出掛け、一人の気楽さと夜行列車は空いていたので4人分の席を独占し、夜景を眺めながらアルコールを満喫していました。良い気持ちになり寝込んでいたら、降りる駅のアナウンスがあり、慌てて背広のジャケットを着て、革靴を履き、旅行鞆を手にしっかり持って下車しました。気が付いて見ると背広の上着を着て革靴を履き旅行鞆を持っているが、下はステテコ一枚と言う格好でプラットフォームに立っている事に気が付きました。

（厳めしい顔をした若いサラリーマンが、この格好でプラットフォームに立っている姿を想像して見て下さい）

到着前列車の中で暑いのでズボンを脱いで洋服掛けに掛け、ステテコ姿で寛いでいたのを忘れて下車したのでした。

残念ながらズボンに乗せて列車は発車してしまったそうです。

② 会社の地下の駐車場で一緒に乗って来た部下の車の駐車の誘導をしていて、柱が有るのにオーライオーライとバックをさせその車の後部を柱にめり込ませた。運転していた部下はバックギアでアクセルを踏んでいると動かなくなったが、まだIさんがオーライオーライと言っているのも更に無

理やり後退させると車の後部が大きなコンクリートの柱にめり込んだそうです。

- ③ 麻雀をしていて、皆で何か焦げ臭いなーと言っていると、実は自分のタバコの火がズボンに落ちて、ズボンが焦げ結局火傷したそうです。
- ④ オフィスの中でワイシャツの裾をズボンの後ろから出し、オフィス内を歩き回る事はしょっちゅう。
- ⑤ 車をドアの取手で自動ロックしそのままオフィスに行き、私とその車の横を通ったらエンジンは掛け放しだったので I さんに知らせました。

因みにキーはしっかり車の鍵穴に刺さっていたのですぐドアを開けられずてんやわんやした。等々

I さんの面白いエピソードを全て集めると本が 1 冊書けると職場で言っている人がいました。私もそう思いますが、本人はその気が無い様でした。

以上雪のグランドキャニオンの思い出と I さんに纏わるエピソードでした。

バブル経済を懐かしむ

池端 千一郎

優れたグラフィックデザイナーであり、小説家でもあるヒキタクニオ氏の著書「バブル・バブル・バブル」(文春文庫)を読んだ。面白かったし、共感する点多々あった。

どうも最近になって、80年代末から90年代初頭にかけてのバブル経済、以下平成バブル経済と言う、に対する世間の認識や評価に、従来とは異なった見方やトーンが出てきたように思う。さらに一部のジャーナリストの間では、この令和の時代に新たなバブル経済が到来する可能性を、「結局バブルは何度も起きる」との認識や判断に基づき、指摘し始めている。

とは言え、良識派とされるエコノミスト、経済官僚、財界人、ジャーナリストなどにとって、本格的なバブル経済は依然として二度と起させてはならない、そして肯定してはならない悪しき経済的事態であり社会状況なのである。

さて、筆者が改めて指摘するまでもなく、ものごとには必ず良い面と悪い面、光と影、功と罪などの両面がある。それは当然バブル経済にも当てはまる。けれども我が国では、バブル経済の弊害やマイナス効果等についてはどれほど指摘し強調しても問題にならないが、そのプラス効果や光の面などを指摘し強調しようものなら、非難と批判の嵐となりかねない。だから良識派とされるエコノミストや経済官僚や財界人の中で、バブル経済のプラス面や効用や光の面などを指摘し強調する人は滅多にいない。

ところで、現在 50 歳以上の日本人に対して、「あなたにとって、景気の良い社会あるいは、絶好調の経済とはどんなものですか？」と問うたならば、殆どの人が、1980 年代後半から 1990 年代前半の、あの華々しくも凄まじいほどに現金が乱舞し、地価や株価などの資産価格が高騰し、未曾有の好景気となった平成バブルの時代を思い出し、或いはイメージするだろう。

ということは、「景気が非常に良い」とか「経済が絶好調」と判断するための基準や目安が、あの平成バブル時代の経済になってしまった世代にとって、その後の21世紀に起きたITバブルとか第二次安倍内閣の経済政策による好景気などは、心の底で「好景気？ どこが？」と感じている可能性は十分にある。

平成バブル経済の凄まじいところは、とにかく業種・業態、企業規模、法人形態、職業・職種の如何を問わず、また大都市圏であると地方圏であるに関わらず、さらに企業、団体、個人の区別なく、収入や所得、利益や黒字額、そして地価や株価等の資産価格が凄まじい勢いで増加・高騰した点であり、たかだか3年間程度の短期間ではあったが、こうした好景気と資産価値の猛烈な膨張が全国規模で続いた点だろう。平成バブルの絶頂期、東京23区の土地代で米国全土が買えると言われたのは、今となっては懐かしい語り草である。

しかも企業や団体は、今と違って儲けや黒字額のうちの多くを社員や株主に対して実に気前よく還元し、交際費、福利厚生費、旅費・交通費等などもふんだんに支出した。結果あの平成バブルの時代ほど、日本人が、思いっきり働き、思いっきり遊び、ありったけ稼いで、ありったけ使った時代は、明治このかたの我が国の近代経済史上いまだかつてなかったと言えるだろう。

そんな時代をバブルの渦中で実際に経験し体験し、直接見聞できた自分は、いささか不謹慎かもしれないが、「なんと幸運であったことか」と過ぎし日の興奮と満足感を反芻している。

というわけで、今後この原稿の掲載は不定期となるかも知れず、全部で何回になるのかもわからないが、平成バブル経済の思い出と共に、バブル経済のプラス効果、光の面、功の面、令和バブルの可能性や秘かな期待などについて、経済学素人の素朴な私見を書いてみたい。

文化講座・講演会

第112回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時：11月21日（木）13:00-15:00 於：2F スターホール
2. 演題：『中世の武家と天皇について』
3. 講師：本郷和人氏 東京大学資料編纂所教授
4. 申込：Eメール・shinsanmokukai@gmail.com 電話・070-6994-0137
フルネーム・卒年・所属（紹介者）
(紹介者) 天地シニアネットワークで申し込んでください
5. 会費（受付にて） 2千円、 婦人千円、学生無料、
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>

7. 今後の予定

第113回 12月19日(木) 『トランプとイラン』
高橋和夫氏 放送大学名誉教授

奈良興寺文化講座 2019年11月21日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講

「維摩経・入門」 興福寺 貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺寺務老院 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

事務局

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に1回発行し郵送しています。

お申込みくださればお送りします。一応、実費として月@350円(4200円/年)をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532

(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・501号

発行：2019年11月15日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651